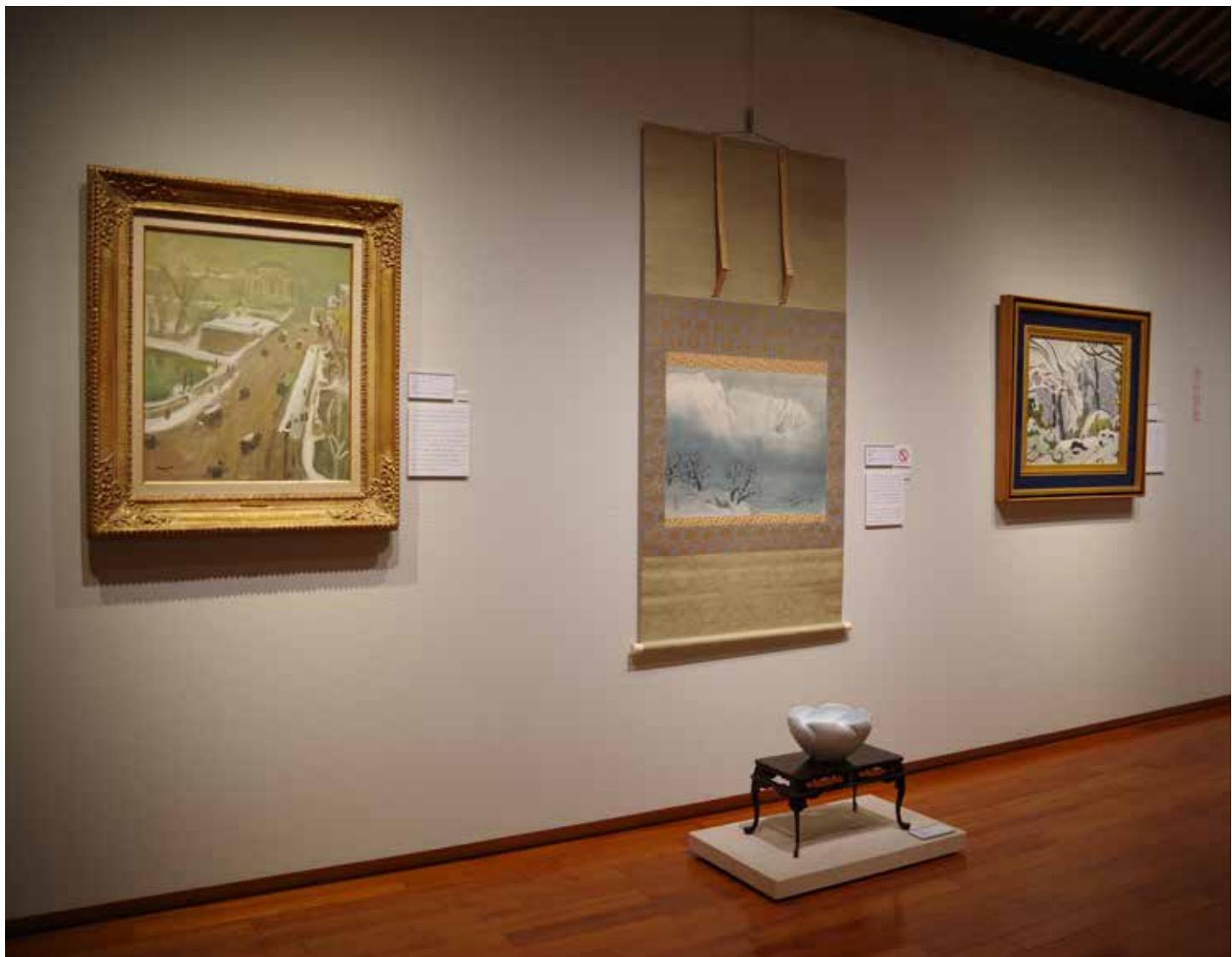


上原 美術館 通信

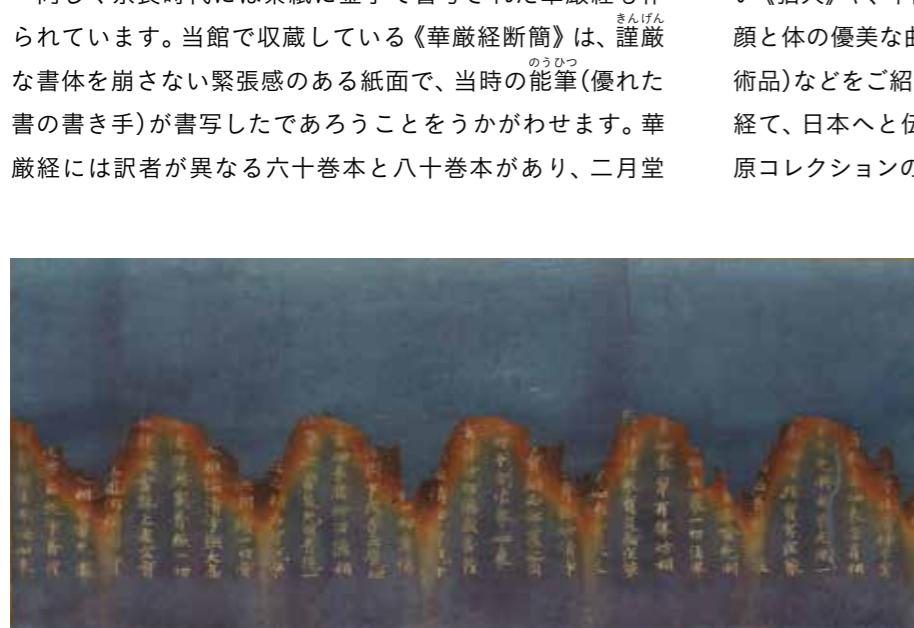
No.
32

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2025年12月26日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



[仏教館] 企画展 東風吹かば 仏教東漸

2026年1月24日(土)～5月18日(月) 会期中無休



華厳経断簡(二月堂焼経) 奈良時代 紺紙銀泥 ※新収藏・初公開



紫紙金字 華厳経断簡 奈良時代 紺紙金泥

古く、日本では春の訪れは東からの風によって運ばれてきました。さまざまな文化が風に乗って各地に拡散するよう、仏教美術も遠く異国の地より日本へもたらされました。またインドで生まれた仏教が西方から東へと広まる様子は、仏教東漸という言葉であらわされます。本展では、さまざまな文化が出あい、日本で花開いた仏教美術を上原コレクションからご紹介します。

今回、新収藏・初公開となる《華厳經断簡》(二月堂焼経)は紺紙に銀字で華厳經が書写され、紙面にはところどころ焼けた跡が残る作品です。古都・奈良に春を呼ぶ修二会。この儀式を行う東大寺二月堂には、奈良時代に書写された紺紙銀字の華厳經が納められていました。江戸時代、寛文7(1667)年に行われた修二会で二月堂は火災で焼失してしまいます。この時に焼け残った經典は、焼け跡の滲みが醸し出す優しく美しい紙面、銀字のプラチナのような独特の輝きで、後世、二月堂焼経の名で愛でられるようになりました。

同じく奈良時代には紫紙に金字で書写された華厳經も作られています。当館で収蔵している《華厳經断簡》は、謹厳な書体を崩さない緊張感のある紙面で、当時の能筆(優れた書の書き手)が書写したであろうことをうかがわせます。華厳經には訳者が異なる六十巻本と八十巻本があり、二月堂

焼経は六十巻本、紫紙金字経は八十巻本が書写されています。紫紙金字の華厳經は、二月堂焼経とともに元は東大寺へ納められていたと考えられ、本展ではこの二つの華厳經を同時にご覧いただけます。

天平經の名品の一つ、《大般若波羅蜜多經卷三百六》(魚養經・薬師寺經／新収藏)も本展で初公開いたします。奈良時代には写經を書写する官立の写經所がありました。写經所では多くの写經がされました。本經もそのうちの一つです。770(神護景雲4／宝亀元)年頃、約2年の歳月をかけて600巻の大般若經が作られ、朝野魚養という人物がこの大般若經を書寫したと伝えられます。そのため、本經は「魚養經」の別名でも呼ばれています。また本經の冒頭には、薬師寺の朱印が捺されていますが、もともと奈良・薬師寺に伝来したことから、「薬師寺經」の名でも知られています。濃い墨色、謹厳な書体で書写された紙面は揺るぎなく、本經の見どころの一つです。

そのほか、古くはオリエントにそのルーツが遡る、愛らしい《狛犬》や、中国・唐時代の影響を残し、ふっくらとしたお顔と体の優美な曲線が魅力の《十一面觀世音菩薩像》(重要美術品)などを紹介します。大陸からさまざまな文化の受容を経て、日本へと伝わった仏教美術。春めく下田の山間で、上原コレクションの仏教美術作品をお楽しみください。(櫻井)

[近代館] 企画展 春、花めく

2026年1月24日(土)～5月18日(日) 会期中無休



安井曾太郎《桜と鉢形城址》1945(昭和20)年頃



小倉遊亀《チューリップ》制作年未詳

少しずつ寒さがやわらぎはじめると、桃色や白、赤、黄色など多種多様な花々が静寂の世界を豊かに彩りはじめます。画家たちは花を通して、うつろいゆく春をやさしく、ときに鋭いまなざしで捉えてきました。

赤々とゆらめく篝火に照らし出される山桜を描いた横山大観《夜桜》。夜空にうっすらと浮かぶ桜に吹き抜ける風は、余寒の冷たさを感じさせます。桜は春を象徴する花の一つで、古くから多くの画家たちに描かれてきました。安井曾太郎《桜と鉢形城址》は、明るくやわらかな桜の色彩がどのよかな季節の到来を知らせます。

小林古径《草花》は、チューリップの花弁を黒で彩ること



小林古径《草花》1951(昭和26)年



横山大観《夜桜》1947(昭和22)年

学芸員による作品解説

日時 会期中の第3土曜日

10時～(近代館)

11時～(仏教館)

※所要各50分

会場 上原美術館展示室

参加方法

当日、展示室にお集まりください

※予約不要・ご参加には入館券が必要です

昨年度静岡県では、仏像を3D撮影しデータ化するプロジェクトがスタート。当館学芸員が技術指導を行っています。

本年度最初の撮影は10月15日、場所は静岡市清水区大内の靈山寺。険しい山道を20分ほど登った山中にある本堂で、秘仏本尊の十手觀音像を守る風神像、雷神像、二十八部衆像(鎌倉~室町時代、静岡県指定有形文化財)の撮影を行いました。二十八部衆像は28体一組の群像ですが、8体は静岡市歴史博物館の企画展に出張中のため、この日撮影したのは22体。朝から山に入り、



伊豆の国市北條寺での撮影



静岡市・靈山寺での撮影

撮影終了は夕闇迫る頃。機材の撤収を終え、真っ暗な山道を懐中電灯の光を頼りに下山する長丁場でした。

翌日は靈山寺の二十八部衆像のうち、残る8体の像を撮影するために静岡市歴史博物館へ。同じく企画展のために博物館に運ばれていた鉄舟寺の文殊菩薩像(平安時代、静岡県指定有形文化財)と、一乗寺の宝冠阿弥陀如来像(鎌倉時代、静岡県指定有形文化財)の撮影も行いました。

次の舞台は伊豆。10月28日、伊豆の国市南江間の北條寺で、本尊の觀音菩薩像と阿弥陀如来像(鎌倉時代、静岡

県有形文化財)を撮影。翌日は伊豆市大平の金龍院で、不動明王像と千手觀音像(平安時代、静岡県指定有形文化財)を撮影しました。

その後、12月に静岡市歴史博物館で展示中の靈山寺の金剛力士像(平安~鎌倉時代)と、静岡市新光明寺の阿弥陀如来像(鎌倉時代、国指定重要文化財)を撮影。今年度の撮影を完了しました。

昨年撮影したデータは、静岡県HP「LEGA-SHIZU」(レガシイで検索)内「LEGA-SHIZU×3D」のページで公開中。今年度撮影分も3月をめどに順次公開予定です。

また2月上旬、静岡中部を会場に、静岡県主催の3D体験イベントが開催される予定。その後、2月22日(日)、当館も講演会「3Dでみる伊豆の仏像」を、伊豆の国市垂山文化センター(垂山時代劇場)で開催します。詳細な情報は追って、上原美術館の公式ホームページなどでお知らせします。ご参加お待ちしております。



図録「伊豆のみほとけ」刊行のお知らせ

現在開催中の特別展「伊豆のみほとけ」の図録を刊行しました。A4判104ページ、写真ページはカラーです。

特別展に出展された21体の仏像を、様々な角度や部分接写した150点の写真で紹介。詳細な作品解説を加えました。ぜひご覧ください。

購入方法

図録の販売価格は1200円。美術館受付でお求めいただけるほか、現金書留での販売もしております。ご希望の方は、氏名、ご住所、電話番号、ご希望のカタログ名(伊豆のみほとけ)、冊数、金額をご記入のうえ、図録代金をお送りください。送料は無料です。

送付先: 上原美術館 〒413-0715 下田市宇土金341

明治、大正、昭和の三代を通じて日本画壇で創作・活躍を続けた横山大観(1868~1958年)は、誰もが知る日本を代表する画家です。約70年余りの画業の中で、大観は数多くの作品を生み出してきました。なかでも富士山は「富士といえれば大観」といわれるほど有名で、描いた数は1,500枚とも2,000枚ともいわれています。富士山を描いて欲しいという注文が多かったことも制作数に拍車をかけたかもしれません、大観にとってそれだけ特別な存在でもありました。大観は「…富士を描くということは、富士にうつる自分の心を描くことだ、心とは、ひつきよう人格にほかならぬ。それはまた気品であり、気はくである。富士を描くということは、つまり己れを描くことである。己れが貧しければ、そこに描かれた富士も貧しい。富士を描くには理想を持って描かなければならぬ。私の富士もけっして名画とは思わぬが、しかし描くかぎり、全身全霊をうちこんで描いている」(『私の富士観』朝日新聞、昭和29年5月6日)と語っています。富士に己を託して、そこに理想を求め続けたからこそ、数多くの富士図を残せたのでしょう。

生涯描き続けた富士山と同様に、大観が描いた画題がありました。それは桜です。その代表作品といえば、1930(昭和5)年にイタリアで開催されたローマ日本美術展に出品の屏風の《夜桜》(大倉集古館蔵)があげられます。1929(昭和4)年の春、大観は上野公園へ山桜を観察するため幾夜も出かけて写生を重ねました。制作されたこの作品は、高さ175cm以上ある屏風2隻(右隻と左隻)が1組となっている六曲一双の大作でした。この大画面に、ぎっしり



横山大観《夜桜》1947(昭和22)年 上原美術館蔵

と迫力のある山桜と松が描かれています。その膨大な数の桜花を描き込むだけでも相当の苦労があったようで、「花に負けそうだよ、本当に負けるかもしれないよ」と大観が制作中に笑顔でこぼしたというエピソードが残されています。豊かな装飾美で見るものを巻きするこの作品が完成したのは秋頃で、約半年かけて取り組んだ渾身の一作でした。世の絶賛を受けたこの作品を皮切りに、富士山と並んで桜は大観の人気作となり、注文が絶えず持ち込まれたといいます。瞬く間に、桜も富士と並ぶ大観の得意画題となりました。

当館所蔵の《夜桜》も桜を描いた一点です。白い可憐な花の傍らにやや赤みを帯びた若葉が葉を広げ、それらは篝火に照らされ輝きます。燃えあがる炎によって静寂な春宵の空に桜花がやわらかく浮かぶようすは、幻想的です。大観は、桜の中でも本作に描かれてい

る山桜を好んで描きました。古くから日本に自生しており固有種である山桜は、江戸時代にソメイヨシノが広まる以前は、桜といえば山桜というほど日本人に長く愛されてきた桜です。それ故、山桜は絵画や工芸品の題材になるなど、日本の文化に深く関わってきました。大観は、日本人の美意識に根差し、日本の山でたくましく生き抜いてきた山桜に自分の理想を映していたのかもしれません。

当館所蔵の《山桜》は、企画展『上原コレクション名品選 春、花めく』にて展示されます。ぜひじっくりと大観が描いた夜桜の情景をお楽しみください。

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、学芸員が解説を行いました。展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しております。開催時間になりましたら、各展示室へお集まりください。※要入館券、詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。



ギャラリートーク

授業入館

10月17日 河津町立河津小学校

10月30日-31日 下田市立下田中学校職場体験

河津小学校は1、2年生を対象にカレンダー作りと作品鑑賞を行いました。下田中学校は2名の職場体験を受け入れ、主に学芸員の仕事について体験しました。



授業入館・職場体験

出張授業

9月17日 下田市立大賀茂小学校

10月4日 伊東市池学童クラブでのワークショップ

11月13日 静岡県立伊豆伊東高校

11月14日 河津町立河津中学校

12月2日 下田市立下田中学校

12月9日 東伊豆町立稻取中学校

大賀茂小学校は鎌倉方面の、河津中学校、下田中学校、稻取中学校は奈良・京都方面の修学旅行の事前学習でお話しました。池児童クラブは日本画を描くワークショップを、伊豆伊東高校は学芸員が日本画について、画材の説明を行い岩絵具で彩色体験を行いました。



出張ワークショップ・出張授業

対外活動

9月6日 日本石仏協会の講演

9月7日 神奈川県立金沢文庫の講演

11月1日 御殿場市仏教会での講演

11月2日 沼津市立図書館の講演

11月16日 静岡市歴史博物館の講演

12月2日 下田市史講座の講演

田島上席学芸員が講演を行いました。神奈川県立金沢文庫は『金沢八景みはとけ巡礼』展(2025年11月9日まで)の講演において、当館の調査によって発見された能仁寺由来の仏像について紹介しました。また静岡市歴史博物館は『しづおかの古仏たち』(2025年12月7日まで)で静岡県東部と中部の仏像についてお話をしました。



『いい伊豆みつけた』収録

秋のワークショップの活動報告**● 「いろの世界をのぞいてみよう****—透明水彩による三原色を用いた色作りの入門編—**

11月3日(月・祝) 当館アトリエ

講師: 小野憲一先生(現代美術作家/当館デッサン・水彩画教室講師)

11月3日、講師に小野憲一先生をお迎えして、親子向けワークショップを開催しました。ワークショップには6歳のお子さまから大人まで、8組18名のご家族にご参加いただき、穏やかな雰囲気のなかでいろいろ遊びを楽しんでいただきました。

今回使用した画材は、パレットに固めた透明水彩絵具と画用紙、平筆というシンプルな道具のみです。透明水彩は、その名の通り透明感のある発色が特徴で、色を重ねることで深みのある表現を楽しむことができます。参加者の皆さんは、絵具の色の美しさを確かめながらゆっくりと制作に取り組んでいました。

扱う色は赤、青、黄の三原色のみ。限られた3色からどれほど多くの色が生まれるのかを体験しながら、「うすめる」、「ませる」、「にじませる」の技法を順番に試していきます。とくに混色技法では、同じ組み合わせでも絵具をほんの少し足すだけで色合いが大きく変わるために、親子で「こんな色になったよ」と見せ合う姿が微笑ましく印象に残りました。

このワークショップの最後には、それぞれが作った色を使い、画用紙いっぱいに自由ないろの世界を描いていただきました。夕暮れを思わせるあたたかな赤色や、海のような深い青など、身近な風景や思い出などから着想を得て、みなさん思い思いに表現されていました。今回のワークショップが、絵具に触れるこの楽しさを感じたり、日常のなかで色に目を向けるきっかけになりました幸いです。

● 「おとの日本画体験」

11月24日(月・祝) 当館アトリエ 講師: 牧野伸英先生(日本画家/当館日本画教室講師)

11月24日、講師に牧野伸英先生をお迎えし、おとな向けの日本画体験ワークショップを開催しました。当日は12名の方にご参加いただき、和やかな雰囲気のなかで日本画の体験がはじまりました。

今回は寸松庵と呼ばれる小さな色紙に、日本画で用いられる岩絵具を使って作品を作成していただきました。はじめて日本画を体験される方が多いため、ワークショップの冒頭では、使用する画材の特性や使い方から学びます。牧野先生の丁寧なご指導のもと、参加者は画材の扱い方を一つひとつ学ばれていました。

なかでも岩絵具は粉末状であることが特徴で、絵皿(絵具を溶かす際に用いる皿)に粉末と、接着剤の役割を果たす膠、そして適量の水を加えて混ぜることで、絵具を作ります。参加者の方々からは、「岩絵具自分で作る工程が新鮮で楽しいです」といった声も聞かれ、初めての画材に触れる喜びが伝わってきました。

制作が始まった当初は緊張から慎重に筆を運ぶ様子が見られましたが、次第に慣れてくると、参加者同士で会話を楽しみながら、思い思いの制作に励む姿が印象的でした。完成した作品には、牧野先生が作例として描き下ろしてくださった『桔梗』を参考にしたものや、季節の草花を題材にしたものなどが並び、どれも個性豊かで素敵な作品が出来上がりいました。

今後もおとなの日本画体験ワークショップを開催予定ですので、ぜひお気軽にご参加いただけました幸いです。また、より本格的に日本画を学びたいとお考えの方は来年度の日本画教室にもぜひご応募ください。



上原美術館では令和8(2026)年4月からの教室受講生を募集しています。

今年度の募集教室は以下の通りです。

◎日本画教室 ◎デッサン・水彩画教室 ◎写経教室 ◎仏教美術講座

応募締め切り: 2026年2月28日(土) ※必着

教室の詳細や、お申込み方法につきましてはホームページをご覧ください。

令和8(2026)年度 教室受講生募集



アトリエ前の柿

美術館の第一駐車場前のアトリエ棟には小ぶりな柿の木が植わっています。今年の秋はびっくりするほど柿が実りました。美術館周辺を見渡すと、たわわに実をつけた柿の木があり、今年はよく実った年だったようです。オレンジ色の実が秋の風景に彩りを添えていました。年末には伊豆でもあちこちで新年を迎える準備が始まります。美術館に隣接する下田達磨大師のお正月行事も宇土金地区の風物詩になっています。美術館は特別展会期中の年末年始も休まず開館しておりますので、伊豆のみほとけとの出あいや、印象派作品を楽しみにお越しください。

(櫻井)



安井曾太郎《薔薇》1931年

展覧会「白の魔法—モネ、大観もを使った最強の色」

ひろしま美術館

2025年12月13日(土)～2026年3月22日(日)

絵画にはさまざまな「白」があります。西洋では古くから画面の最も明るい部分にハイライトとして用いられました。一方でモネは白い雪を水色やピンクなど、色で「白」をあらわします。また、日本画家は貝殻から作られた胡粉のほか、水晶や大理石などを碎いた岩絵具で、多彩な「白」を表現します。

本展では西洋絵画や日本洋画、日本画、版画など多彩な作品から「白」がどのように使用されているかに注目する意欲的な展覧会です。当館からは、安井曾太郎が「その自分僕は白色を好んだ」という《薔薇》、岡鹿之助が大胆な筆致で雪景色をあらわした《林》を出品します。モネやルノワール、ファンタン=ラトゥール、ロートレック、ブーダン、横山大観、速水御舟らによる多彩な出品作とともに、「白」の世界を描き出す上原コレクションをお楽しみいただければ幸いです。

(土森)

※詳細は、ひろしま美術館の公式ウェブサイトをご覧ください。

次回休館日は2026年1月13日(火)～1月23日(金)です。(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間

9:30～16:30

最終入館は16:00まで

休館日

展覧会会期中は無休

展示替え日のみ休館

入館料

大人／1,000円、学生／500円

高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引